

初級日本語文法学習に使える 中上級語彙の検討

——中国語系日本語学習者のための語彙
学習先行モジュール開発に向けて(注1)——

松下 達彦

0. はじめに

周知の通り、日中両語には表記上の同形語(以下単に「同形語」が多数存在し、社会科学・自然科学の用語を中心に基本義の一致する語も少なくない。本稿は松下(2001)の「中国語系日本語学習者のための語彙学習先行モジュール」の考え方にに基づき、初級文法学習に使える中級以上の同形語を、日本語能力試験2級以上の語彙(国際交流基金ほか(1994))から一部抽出し、母語知識の転移に伴う問題を社会言語学、語彙論の観点から論じる。また、母語知識の正の転移(正用を産出する転移)を活かした文法学習への応用について筆者が実施したテストの結果を報告する。

1. 中国語系日本語学習者のための語彙学習先行モジュールとは何か

松下(2001)の主張はおおよそ以下の通りである。

「中国語系学習者がそろっている教育環境において、日本語の語彙学習を言語学習を構成する一部分として独立させ(モジュール化)、特に初級後半あたりから文法学習の進度よりも先行し

て習得を進めるようにする。特に、中国語系学習者に学習しやすい中上級語彙のうち、幅広い場面で使用できる語彙、および学習者の専門領域の語彙は早い段階で学習するようにする。」

主張の根拠および付随的提案はおおよそ以下の諸点に要約される。

(1)同形語は現代日本語の常用語彙に大きな割合を占め、中国語系学習者の母語知識の転移は文法習得や日本語習得全体に影響する。漢字を媒介とした正負両面の転移が、作文に加え会話でも発生するが、これは非漢字圏の学習者には見られない現象である。

(2)中国語系学習者にとって漢字語学習モジュールは既存の認知スキーマを利用する学習なので無意味な暗記ではなく、また近年の言語認知理論などにおいても語彙学習のモジュール化を支持する論拠が見られる。

(3)語彙はコンテキストを構成する重要な要素の一つであり、語彙が多いほど習得に有効なインターアクション(中国語で、「互动」「应对」)を産み出せる。中国語系学習者は受け身、使役、条件文などの初級文法の難点を、中上級の語彙を用いて豊富な例文・タスクで学習できる。

(4)「初級」や「中級」の語彙の選定に最大の影響を与えるのは使用頻度だが、非日本語圏では、頻度の高い語彙から学習する必要はない。日中両語の語彙は自然科学・社会科学などの専門分野の語彙において共通性が高く、日常語彙において低いので、中国語系学習者の優位性が発揮できるのは、中級以上とされている論理的、抽象的、専門的な言語活動においてである。

(5)日常言語運用能力(BICS)と認知/学習言語能力(CALP)で共通するのは統語能力や基本語彙の能力であるが、使用場面、語彙、関連知識などでは異なるので、文法学習に論理的な日本語で

の学習を導入し、並行してBICSの学習に取り組みばよい。

(6)表記上の「同形語」のうち、転移の影響が最も大きいのは意味・用法面であり、音韻面や字体の相違は意味面ほど影響はなく、一部のものだけに注意すればよい。

(7)先行研究を総合すると、同形語の習得のしやすさは、基本的な意味・用法が①一致するもの、②全く異なっているもの、③一部が重なるが一部がずれているもの、の順である。プロトタイプ理論によれば典型的用法から習得し、それから次第に微細な意味・用法を認知するようになる(白畑ほか(1999))ので、母語知識の転移も同様と考えられ、学習の初期の段階では基本義が一致していれば意味の微細な相違は無視すればよい。

(8)普通文法モデルなどから考えると、語の意味が日中で共通の場合でも、ともに特殊なら習得が難しく、日中で異なる場合、中国語のほうが普遍的なら日本語の習得は困難だが、日本語のほうが普遍的なら日中両語で異なっても習得は難しくない。対照研究は重要だが、単なる相違点の記述だけでなく、相違点のどちらがより普遍的かについても考慮し、言語項目を習得しやすさの観点から分類する必要がある。

2. 同形語における意味・用法の微細な相違の転移に関する社会言語学的考察

意味・用法の微細な相違は基本的には無視してもよいと考える(上述の(7)、松下(2001))。プロトタイプ理論から考えれば母語と目標言語の微細な相違は転移しにくいという理由のほか、社会言語学的な観点から以下の2点を追加する。

2-1. 非母語話者による言語社会形成への参与

第一に言語の体系は固定普遍ではなく常に言語社会の中で変化し続けるということである。非母語話者の影響による変化

(言語接触)も変化の要素の一つである。かつてある学生が故郷を紹介する作文の中で以下の(a)のような文を書いた。

(a)大連は海に包まれた街です。

「包まれた」は通常の母語話者なら「囲まれた」とするであろうが、この文を読んだとき私の中に青空と海が街全体を立体的に「包む」イメージが湧いてきた。もし平面的なイメージで「包む」を使ったなら言語教育の立場からは「囲む」との違いを指摘すべきだが、これを完全に誤用と言い切ることはできない。これは例えば「水曜日」のことを「木曜日」と言うという誤用とは性質が異なる。発話者の意図が伝わるかぎりでは非母語話者にもその言語話者特有の表現があってもよい。中国語系学習者であれば漢語を多用してもよいと考える。以下の(b)~(d)の下線部の語は中国の学生の造語による非慣用的な派生語である(松下・玉岡(2001))、文は筆者の作例)。

(b)彼はこの件に関しては全く無功績だ。

(c)日曜日も含めて非祝日には毎日仕事がある。

(d)彼が不協力の態度ならこちらもそれなりの態度で臨む。

これらは日本語母語話者にとっても容認できる文であろう。語彙は文法以上に変化しやすく、意味の核心が伝われば容認されやすい。因みに接頭辞の「無-」「非-」「不-」ともに日本語能力試験2級レベルであるが、中国語系学習者なら初級で学習できる成分であろう。

2-2. 確認のストラテジー使用の重要性

第二に、発話者の意図通りに伝わるかであるが、意味は語や文のみを通じて独立して伝わるのではなく、状況があり参加者相互の意味交渉がある。したがって、同形語を初めとする漢語系語彙を、母語(中国語)知識を利用して使う場合、反復、言い換え、質問などによる確認のストラテジーを使うことが肝要である。こ

これはコミュニケーション・ストラテジーであると同時に学習ストラテジーでもある。利用できる母語知識があり、あとは日本語社会で容認され得ることが確認できれば効率的に語彙習得が進むはずである。

2-3. 同形語の意味・用法の対応範囲の大小が転移によってコミュニケーションに及ぼす影響

同形語を通じて母語知識の意味・用法が転移すると仮定した場合、コミュニケーション上で発生する問題は、受容的活動(聞く・読む)であるか産出的活動(話す・書く)であるかによって異なることが予想される。以下、その点について、日本語能力試験2級の語彙のいくつかを例として、意味・用法の対応範囲の大小が転移を通じてコミュニケーションに及ぼす影響について論じる。

2-3-1. 対応する日本語のほうが意味・用法の範囲が広い場合(日>中)

A 誤解(日)	産出 ←	C 誤解(中)	A 姿勢(日)	受容 →	C 姿勢(中)
誤解(日)		誤会(中)	姿勢(日)		態度(中)
B		D	B	(類推) (誤解?) (不明?)	姿态 D

図1 同形語の意味・用法の対応例(日>中)

例えば「誤解」は中国語の「誤解」「误会」の両語に対応していると考えられ、日本語の「誤解」のほうが使用域が広いと思われるが(図1)、これを転移の観点で考えると、産出的活動の場合には問題がないだろうと思われる。誤用の可能性が少なく、コミュニケーション上の障害は予想されない。

逆に受容的活動の場合、日本語のほうが意味・用法が広ければ、対応する中国語にない意味・用法(図1のB)について共通の意義からの類推が可能かどうか問題であろう。例えば「姿勢」という語には身体的姿勢の意味のほかに「政治姿勢」「前向きの姿勢」などの隠喩的用法があるが、中国語にはこの用法はない。隠喩には人類共通の思考様式が反映されやすいが、文化差も存在する。類似の隠喩が学習者の文化に存在すれば理解はしやすい。「姿勢」の隠喩的意味については中国語では「態度」「姿态」(「姿」は日本語の「態」の簡略字体)が対応し、類似の隠喩が存在し、しかも「姿」という表記上のつながりがあるので「政治姿勢」という隠喩は比較的理解されやすいものと予想される。

しかし、語によっては誤解や不明に終わる可能性がある。聞き返しや確認による相互調整を経て理解に至ればよいが、誤解のまま終わる可能性もあるので、学習・教育上も注意が必要である。

このタイプの語は数多いが、例えば「提出」(「提出」「提交」「提供」)、「安定」(「安定」「穩定」)、「方法」(「办法」「方法」)、「魅力」(「魅力」「吸引力」)などがある。

2-3-2. 対応する日本語のほうが意味・用法の範囲が狭い場合(日<中)

「翻訳」は日本語では書面語の訳にしか用いられず、口頭語の場合は「通訳」を用いるが、中国語の「翻译」はどちらにも用いられる(動作主の意味もある)。日本語の「体育」は中国語の「体育」に相当するが、中国語の「体育」には「スポーツ」「運動」など他の対応関係もあり、同形語として見た場合、日本語のほうが意味が狭い(図2)。

A 翻訳(日)	産出 ←	C 翻译(中)	A 体育(日)	受容 →	C 体育(中)
通訳(日)	←	翻译(中)	スポーツ(日)		体育(中) D
B	(誤用?)	D	運動 B		运动(中)

図2 同形語の意味・用法の対応例(日<中)

これを中国語知識から日本語知識への転移という観点で考えると、受容的活動の場合には問題がないが、逆に誤用を産出する可能性がある。「通訳」のことを「翻訳」とってしまうような誤用こそは表記を媒介として発生する母語知識の負の転移(干渉)であり、欧米の第二言語習得研究では取り上げられない側面だと言える。「通訳」の意味で「翻訳」を使用するというインプットはあり得ないからである(注2)。これはコミュニケーションに支障をきたす可能性があり、学習・教育上も注意が必要である。

このタイプには、「体育」と「スポーツ」、「児童」と「子ども」が併存しているように、日本語のほうに複数の語種の類義語を有する場合が多い(3-2で後述)。

付言すれば、2-3-1と2-3-2で述べた問題は、日本語系学習者のための中国語教育の場合は全く逆の関係になると考えることができる。

3. 同形語の意味・用法の相違の類型

上述の同形語の意味・用法の範囲の大きさを規定する要素にはさまざまな類型がある。

以下、その点について、日本語能力試験2級の語彙の範囲から、特に意味・用法の一致度の高い語彙を対象として、相違を類型を例示する。

3-1. 共起成分の相違

「提出」の基本義に日中両語で大きな差異はないように思われ、意見や要求など共通の対象にも用いるが、日本語では申請書や答案など、書類に用いることが多い。この場合、中国語では「提交」(あるいは単に「交」)を用いるのが普通である。このような共起成分の相違は、常用の範囲で共通の用法と相違する用法を整理して示すことが必要であろう。

3-2. 文体や待遇的意味の相違

文体・使用場面が相違する例としては日本語のほうに同形語と類義の和語や外来語が併存している場合が多い。「期限」と「しめきり」、「自尊心」と「プライド」、「幸運(な)」と「ラッキー(な)」、「設計」と「デザイン」などである。同形語の対応として考えた場合、多くは日本語の方が同形の中国語よりもややフォーマル、あるいは書面語的である。

また、「通知」は、対象(内容)には日中共通の用法が多いが、日本語では「お知らせします」というべきところも中国語では「通知」が使えるというように、待遇面で相違している。日本語では敬意を含めて表現する場合には「通知」は使用しないであろう。

3-3. 統語機能の相違

中国語系学習者に多い誤用に「*参考します」や「*関心します」がある。これは中国語に動詞用法がある一方、日本語は「参考にする」「関心をもつ」というように名詞用法しかないために発生する誤用だと考えられる。意味は動詞的であり、直観的には中国語のほうが普遍的だと感じられる。このような場合はより誤用が生まれやすい。

逆に中国語が名詞用法中心で、日本語に動詞用法があるものとして「判断」「分類」がある。中国語は「作出判断」「进行分类」のように機能動詞(‘作出’‘进行’)と結合する名詞の用法が主である。この場合、「判断する」「分類する」という動詞用法の習得が難しいという仮説が立てられる。「*判断を作る」という誤用も

予測できる。しかし、筆者の直観では「*判断を作る」のように「判断」をモノ化する隠喩に普遍性はなく、このような誤用の可能性は小さい。また、「判断をする」「分類をする」のように機能動詞「する」も使用可能なため誤用の可能性は小さい。しかしながら、動詞用法「判断する」「分類する」の習得が中国語系学習者には(他の言語話者以上に)難しいという仮説は検証に値する。

そのほか「根拠」には日中同義の名詞用法があるが、中国語には前置詞(中国語学で言う‘介词’)用法や動詞用法がある。しかし、この点も筆者の観察では「*…に根拠した～」のような負の転移は少ない。このような心理活動的な意味は動詞の典型的な用法ではないため、動詞として転移しにくいのではないかと考えられる。

3-4. 語形成機能の相違

同形語のなかには「不景気」「運動会」「日常生活」のように派生語や複合語の用法が類似していながら、その語基の用法が相違する場合がある。「不景気」は日中同様に用いるが、「景気」は日本語のほうが幅広く用いられる。「運動」「日常」にも日中の用法にズレがある。派生語や複合語を先に習得し、その語基の用法に誤用が生じることが予測できる。

4. 「同形語」を使用した例文による日本語未習者対象の文法理解テスト

上述の1.の(3)で述べた「中国語系学習者は受け身、使役、条件文などの初級文法の難点を、中上級の語彙を用いて豊富な例文・タスクで学習できる。」という点を論証する一つの試みとして、以下の例文(e)~(g)を中国語を母語とする日本語未習者に中国語に翻訳してもらおうというテストを試みた。すなわちこれは漢字の部分だけを見て文意を類推するテストである。対象は北京師範大学の在学学生24人(18歳~29歳、男性13人、女性11人)で母語はすべて中国語である。例文(e)~(g)中の太字の語は日本語能力試験2級以上の中上級語彙で、それ以外はすべて日本語

能力試験3級以下の初級語彙である。

(e)努力すれば必ず成功する。

(f)毎日温泉に入れば健康になります。

(g)資金を有効に運用すれば利潤率は向上するはずだ。

(e)の前件「努力する」と後件「成功する」の接続成分は以下の通りである。

‘才’:12名…〈只有努力才能成功〉〈努力才会成功〉〈必须努力才能成功〉等

‘就’‘只要’:4名…〈努力就能取得成功〉〈只要努力必会成功〉等

その他:8名…〈努力不懈一定能够成功〉〈付出努力必将成功〉〈努力是成功之母〉等

(f)は複文に訳されることは少なかったが、前件「温泉に入る」と後件「健康になる」の間にある成分を抽出すると以下のようになる。

‘有益(于)’:12名…〈每天泡温泉有益健康〉〈每天用温泉淋浴会有益于身体健康〉等

‘(有)利于’:3名…〈每天泡温泉能利于身体健康〉〈每天洗温泉浴有利于身体健康〉等

その他:9名…〈可促进〉〈对~有好处〉〈能够保持〉等の文型を使用

(g)の前件「資金を有効に運用する」と後件「利潤率は向上する」の接続は以下の諸点に分けて考える。まず‘使’を用いる人が7名で、‘才’が5名であった。また、可能の意味の表現を見ると‘能’または‘能够’が10名で、‘可以’が5名、‘会’が3名であった。あとはその組み合わせで〈才能〉〈可能使〉など多様な表現が見られたが、これらを全く用いないものが6名あった。その中には〈…是~的前提〉〈…依靠~〉のように条件のバと重なる意味をもつ回答も見られた。

松岡(2000)によれば条件のバは「後件の成立が望まれている」という文脈で、そのためにどんな前件が必要かを述べるような文(前件に焦点のある条件文)には、最もふさわしい形式である。その意味では上述のどの回答もバと重なる意味を持つと考えられる。訳し方は多様だが、翻訳のテストとして考えた場合、厳しくみても7割以上は正解だと言える結果である。被験者にバの意味を類推してもらったところ、〈能(够)〉6、〈使〉〈导致〉5、〈就〉2、〈才〉2、〈得到〉2、その他7(一部重複回答あり)である。

ここでは、これらの例文ですぐに条件のバが習得できると言いたいわけではない。しかしながら、説明による演繹的な教授法でなく、コミュニケーション・タスク(中国語で‘交际性任务’)も使い、帰納的なアプローチで学習者の推論能力を発揮させて習得を進めるには、学習者の認知スキーマ(一般的知識の枠組み)を最大限に生かす文脈を作り出すことが必要である。それには語彙が多い方が有利である。上述の結果を見ると、一定の文脈では多くの被験者が一定の類推をする傾向が顕著である。自然習得のためには、如何に正しい類推を導けるかが重要である。そのためには、中国語系学習者の場合、従来の語彙レベルの分類にとらわれることなく、基本義の一致する同形語ならば中上級語彙であっても初級から積極的に導入すべきで、それが初級後半の文法の難点を克服する近道である。

5. おわりに

同形語を媒介とした正負両面の転移は必ずあり、しかもそれは少なくとも認知処理においては上級レベルまで影響がある(玉岡・松下(1999))。それならば利用できる母語知識は早々に利用し、同時に負の転移を意識的に克服することを考えるべきであろう。この考え方に基づく教材やプログラムの開発およびその実施による効果の検証が今後の課題である。

注

- 1 本稿では「中国語を母語もしくはそれに準じる言語とする学習者」を中国語系学習者と称する。漢字を媒介とした母語知識の転移が問題なので、中国語話者という語は使用しない。
- 2 同族関係にある2言語、語彙の借用関係にある2言語の間には対応関係にある語彙の表記が類似していることがあり、本稿の問題と類似すると考えられるが、漢字が表意文字である点、日本語における漢語の占める割合の大きさを考慮すれば、やはり特殊である。

参考文献

1. 国際交流基金、(財)日本国際教育協会編著、日本語能力試験出題基準、凡人社、1994
2. 白畑知彦ほか、英語教育用語辞典、大修館書店、1999
3. 玉岡賀津雄・松下達彦、中国語系日本語学習者による日本語漢字二字熟語の認知処理における母語の影響、見：第4回国際日本語教育・日本研究シンポジウム「アジア太平洋地域における日本語教育と日本研究：現状と展望」、香港理工大学、1999
4. 松岡弘監修、庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著、初級を教える人のための日本語文法ハンドブック、スリーイーネットワーク、2000
5. 松下達彦、中国語を母語とする日本語学習者のための語彙学習先行モジュールの提案—第二言語習得理論、言語認知、対照分析、語彙論の成果を踏まえて—見：中国日語教学研究会、日語学习与研究、2002年第1期、2002
6. 松下達彦、玉岡賀津雄、关于中国人习得日语汉源派生词问题—对非惯用词及错误的分析—、见：汉日对比语言研究会《第4届国际汉日对比语言学研讨会》、北京外国语大学、2001.8.19

(桜美林大学助教授)